

調査日 素材生産協同組合 9月7日 (開設記念市)

この日は買い方が少なかった。県森連の市と吉田商店の製品市が重なっていた。入札は少ない訳では無く、早々と入札を済ませて他の市へ行ってしまった様だ。

ウッドショックのバブルはあっという間に消えて、取り残されたのは、ここぞとばかりに補助を計画した自治体と、その補助金で施設を拡充した、工場だった様で、梯子を外された様な状況の様だ。

開設記念市と言う、お祭りの市だがひっそりとした様子だった。

以前はブロックで大きな炉を作り、炭火焼きで盛大にアユを焼き、それをほおぼりながら、丸太を見るような市で、県職員や地元議員などの来賓も大勢招待していた。今はそんな面影もないひっそりとした記念市だった。

市の内容は、合板用のカラマツは、富山県のウッドリンクが相変わらず20,000円を超える値段で買っているが、その他はほとんど土木用材を生産している下仁田の白山製材と沼田の山平木材の落札が多かった。

この人達の値段は、大体1m³当たり数千円だが、どんどん落札している。

売れ残るのは、4.0mの丸太で角材用の14cm~20cm・中目材の22cm~30cmで、特にスギは見向きもされていない。

調査日 群馬県森林組合共販所 9月21日 (秋需さきどり市)

県新連の市も、”秋需さきどり市”と銘打った記念市だった。この市は、私が現役の時に始めた市で、秋の需要期に弾みをつけるために企画した市だった。

こちら明細書の表紙に”秋需さきどり市”と書いてあるだけで特に変わったことをする訳でも無い市で、買い方も気づかない様で、素生協の市と同じく名前だけの記念市だった。

記念市の名前を見て、「これから秋の需要期に入って行くんだっとなあ」などと思いながら、目の前の市を見ると、秋の需要期が思い出の様だ。

こちらでもウッドショックに取り残された話を聞いた。補助金で広い工場を計画し着工したところ、資材不足で機械が手に入らない。製材機を据付ても、送材車が動くレールが手に入らない、と言った様子で、工場が完成するのに3年は掛かる、と言う有様だが補助金の入った事業なので、工期が年度内だが、とてもそんな状況ではない。気の毒な事だ。と言う話を聞いた。

合板用材が売れなくなったのは、ウッドショックを聞いた、中国がロシアのシベリアカラマツを輸入して、大量に合板を売り込んできた様だ。

合板工場は接着剤も同じ工場内で作る。中国製の合板は糊が硬くて良質とは言えないが、日本の合板工場は高く買った国産材を抱えて、押されている様だ。

